鳥取大学１年生のTOEICに対する意識調査についての報告

Trevor　SARGENT　　小 林　昌 博

鳥取大学　教育センター

1.　はじめに

本学では、1年生は5月と12月にTOEICを受験することが義務付けられている。平成22年度入学生の中からサンプルとして抽出した約400人に対して、5月と12月の2回のTOEICの試験の結果をふまえて、TOEICに関するアンケートを実施したので本稿でその結果を報告する。12月に受験したTOEICのスコアは、1月中に実践英語Bの授業において返却されるが、今回のアンケートはスコアを返却した直後の同じ授業中に行われた。サンプルである400人は5月に1回目のTOEICを受験している。

2.　調査の背景

TOEICのスコアは、実は正確な点数を表しているわけではなく、むしろある幅（かなり広い）を持った確率の範囲を示している。この事実は、TOEICのような試験が計測しようしている外国語能力というものがとても複雑で抽象的な概念なので、正確さを伴うある特定の点数を持って計測することが実質上不可能であることを考慮に入れれば、驚くべきことではない。しかし、TOEICが「外国語能力」をできるだけ正確に計測しようと試みていることは事実であるため、試験問題を作成しているETSは「TOEIC Technical Manual」などの出版物の中で、テストの結果の誤用や誤解を防ぐためにテストの正確さに関する限界を明確に説明している。また、前述の「TOEIC Technical Manual」では、テストの妥当性や信頼性、測定の標準誤差（Standard Error of Measurement）や差の標準誤差（Standard Error of Difference）といった重要な概念が詳細に述べられている。より丁寧な説明はTOEICの「Examinee Handbook」に記載されている。残念なことに、これらのマニュアルなどの出版物には日本語版が存在しない。日本においてTOEICの試験が広く浸透している現状を考えれば、日本語版が存在しない合理的な理由を考えるのは難しい。本稿では、これらの出版物で示されて

いる測定と差の標準誤差についてふれている。

TOEIC のスコアに関して言えることは、その受験者の「本当のスコア」がそのスコアの±70 点、つまり 140 点の範囲内にある確率が 95%（95%の信頼区間）であるということである。前期に受験したスコアと後期に受験したスコアの比較といった、異なる 2 つの試験における比較になると、少なくとも±100 点の変化がないと本当に差が出たとは言えない(95%信頼区間)。

本当に英語力が伸びたと言うには 100 点以上のスコアの上昇が必要となることはすでに述べた。そうすると、比較対象となる 2 回の TOEIC の試験で本当に差を出すためには、その試験と試験の間に学生が英語力を伸ばすために十分な学習時間が必要となってくることは想像に難くない。この必要な学習時間について ETS に問い合わせたところ、「TOEIC Examinee Handbook」にあるような答えを得た。ここに日本語に訳して引用する。

> *TOEIC のテストは、ある特定の英語の授業内容に基づいているものではなく、英語の習熟度、つまり英語を使用する総合的な能力、に基づいているものです。習熟度の伸びにはある程度の時間がかかり、訓練や学習の組み合わせを通して成し遂げられるものです。(pp.4)*

Saegusa (1985)では、少人数のクラスでの研究において 100 から 200 時間の授業時間が最低限必要だと主張している。最近の研究では、Wood (2010)が「TOEIC も Bridge も 1 回目のテストから 2 回目のテストの間の授業時間が 90 から 120 時間に満たない場合の伸びを測定するようには設計されていない(pp.42)」という ETS 代表 Robert Woodhead 氏のインタビューにおける発言を引用している。

同様に Childs (1995)は、「TOEIC は授業時間が少ないプログラムにおける個人の学習の伸びを評価するために使われるべきではない。あるいは非常に注意を払って使用されるべきである(pp.73)。」と主張し、TOEIC を学習者の伸びを計測するために使用することに対して警告を発している。一般的には、53 時間の授業時間を費やしたクラスを使用した彼の研究では、期待される結果は十分に差の標準誤差内に入ると言える。53 時間学習した場合、期待される結果は、TOEIC 高得点レベルの受験者はおおよそ 15 点プラス、低レベルの受験者は 50 点プラスほどである（Prolingua Executive Language Services)。15 点から 50 点の差は、差の標準誤差±100 点の範囲内に入っている。TOEIC は短期間の学習時間の伸びを計測するようにデザインされていないので、このようなわずかな伸びをスコアとして反映することができない。

Childs はテスト間の差は大きな差を見せると指摘する。

> *結果として、前回の試験と比較してスコアが下がることがあり得るし、その差は比較的大きいかもしれないが、その差は誤差の範囲におさまり、実質的に意味がないこともある。また、連続して低いスコアを獲得した場合、副作用として学習者のモチベーションを下げ*

てしまうということがあり得る。(pp.73)

本稿で調査の対象になっている学生のうち、スコアが下がってしまった学生も少なくはない。実に 3 分の 1 以上の学生が、差の標準誤差におさまる範囲でスコアの低下を示している。

本学の 1 年生には、5 月の 1 回目の受験から 12 月の 2 回目の受験の間に、60 時間の授業時間が確保されている。前期はコミュニケーション英語 A と B、後期は実践英語 A と B を受講することになっている。後期の実践英語は、学部ごとに前期の TOEIC のスコアに基づいてクラスを 5〜6 レベルに分けている。

2 回とも TOEIC を受験した新入生 986 人のうち、606 人(61%)のスコアは上昇し、350 人(35%)のスコアは下がってしまった。30 人(3%)は同じスコアであった。すでに述べた通り、差の標準誤差の点数域は 200 点（±100 点）なので、その範囲を超えたスコアの変動を示した学生のみが、本当に英語力が伸びた、あるいは下がったということができる。その差が 100 点以内であれば、その変化が本当であるというのは難しい。スコアが上昇した 606 人のうち、100 人（全体の 10%、スコア上昇者のうちの 17%）が 100 点以上の上昇を示した。つまり、100 人だけが、スコアにおける伸びが本当であるということができる。スコア上昇者の残り 506 人に関しては、スコアの伸びが統計的に有意であるということはできなかった。

同様に、スコアが下がった 350 人のうち 23 人（全体の 2%、スコアが下がった学生の 7%）だけが 100 点以上のスコアの低下を見せている。残りの 327 人（スコアが下がった学生の 93%）に関しては、変化が小さすぎて差が有意であるということはできなかった。

本学の共通教育の科目である実践英語の状況は Child の調査の状況と共通点が多いので、彼の警告は特に本学の状況に当てはまると思われる。仮に学生が、スコアは確率の範囲を表しているのであって、英語力の正確な測定値ではないということに気付いていないならば、前期と後期のスコアの差から間違った印象を受けることも考えられる。スコアが上昇した場合でも、その差が 100 点にも満たないのにもかかわらず、英語力が伸びたと思ってしまうこともあり得る。逆に、仮にスコアが下がってしまった場合、統計的に英語力が下がってしまったということができないにもかかわらず、英語力が下がってしまったと思う学生もいるかもしれない。

学生が TOEIC のスコアの正確さについてどのように感じているのか、また、前期と後期の試験のスコアの差がどのように英語学習の態度に影響しえたかを明らかにするために、12 月の試験のスコアを返却した直後に、サンプルとして選んだクラスでアンケートを実施した。母集団の偏りを少なくするために、湖山キャンパスの 3 学部の実践英語 B の各クラスのうちの上、中、下位クラスを調査の対象とした。

3. アンケートの結果と分析

本節では、アンケートの結果とその分析を報告する。なお、使用したアンケートを資料として本稿の最後に添付している。アンケートは無記名形式で行われた。表1は、1回目(5月)と2回目(12月)のスコアの推移に関する質問の結果である。1回目と2回目のスコアが同じであった学生は実際には3%であったが、自己申告の形式である本アンケートでは、全体の13%が同じであったと返答した。これは、アンケート記入時に1回目の自分のスコアを正確に覚えておらず、おおよそ同じであったと推測して答えたからだと考えられる。

表1: 1回目と2回目のスコアの比較

	人数	割合(%)
上がった	219	55%
同じだった	50	13%
下がった	128	32%
合計	397	100%

表2は、TOEIC試験が英語力を正確に測定できていると思うかどうかに関する質問である。この質問項目は5段階での回答になっており、平均は3.32である。表2から、学生はTOEICの正確さに関して概ね好意的にとらえていることがわかる。したがって、学生は差の標準誤差が示すよりも1回目と2回目TOEICのスコアの変化が意味のあるものと考えやすいだろう。このことは、学生がスコアの誤差に関する詳細な情報や理解がないことを意味している。これらの情報が日本語ではなく英語のみで公表されていることを考慮に入れれば、この結果は驚くべきことではない。

表3は、2回目の結果についてどのように感じるかという質問に対する回答をスコアが上昇したグループと下降したグループ、変化がなかったグループに分類した表である。回答する項目は複数項目回答可としてアンケートを実施したので、各グループの割合(%)は合計で100にはなっていないことに注意されたい。表中のある数字に関しては驚くにはあたらないはっきりとしたコントラストが見てとれる。1回目と比較してスコアが上昇したグループでは、「うれしい」という回答が一番多く(86 (39%))、逆にスコアが下降したグループでは、「落胆した」という回答が一番多かった(47 (36.7%))。しかしながら、「特に気にしない」という回答が多く、これはすべてのグループに当てはまる。スコアの変化とは関係なく、114人(28.7%)の学生がTOEICのスコアを気にしていないことが読みとれる。これだけ多くの学生がスコアに関して無関心であることは驚きである。また、自分のスコアの本当に意味するところを正確に知らされていないのではないかと思わせるような、TOEICに関する「困惑

している」という印象を持った学生が各グループで多いことも共通した特徴である。最後に、「やる気がなくなった」と回答した学生の人数は、各グループ共通で少ない。つまり、TOEIC に対する無関心や困惑といった印象を抱く学生がいるなかで、スコアの結果は必ずしも学生のやる気を奪っているわけではないことがわかる。

表 2: 英語力とスコアの関連性

	人数	割合
5. とても正確に測定できていると思う	33	8.3%
4. ある程度正確に測定できていると思う	138	35%
3. まあまあ正確に測定できていると思う	163	41%
2. それほど正確に測定できていないと思う	48	12%
1. まったく正確に測定できていないと思う	15	3.8%

表 3: スコアの変化とそれに対する印象の関連性

	スコア上昇	スコア下降	変化なし	合計
うれしい	86 (39%)	4 (3.1%)	5 (10%)	95 (23.9%)
悲しい	13 (6%)	32 (25%)	7 (14%)	52 (13%)
落胆した	21 (9.6%)	47 (36.7%)	11 (22%)	79 (19.9%)
特に気にしない	59 (27%)	34 (26.5%)	21 (42%)	114 (28.7%)
やる気がなくなった	2 (1%)	8 (6.3%)	2 (4%)	12 (3%)
満足だ	29 (13.2%)	9 (7%)	1 (2%)	39 (9.8%)
困惑している	25 (11.4%)	15 (11.7%)	7 (14%)	47 (11.8%)

表 4 は、2 回目の結果が英語を学習していく際の動機づけにどう影響があるかをまとめた結果である。28%の学生が英語を学習する動機には影響がないと回答しているが、大部分(65%)の学生は、少なくともやる気につながったと回答している。少数の学生(6.2%)が、やる気を削がれたと回答している。この 5 点スケールの回答の平均点は 3.67 で、TOEIC を受験することは学生への動機づけとなっていることを示している。

表 4: 2 回目のスコアと英語学習の動機への影響

	人数	割合
5. かなりやる気になった	47	11.8%
4. 少しやる気になった	211	53.3%
3. 影響はない	114	28.8%
2. 少しやる気がなくなった	11	2.7%
1. かなりやる気がなくなった	14	3.5%

表 4 の内容をスコアが上昇したグループと下がったグループ、変化がなかったグループごとに分類して平均を計算すると表 5 のようになる。スコアが上昇したグループ、下降したグループ、変化がなかったグループ間で平均に有意な差があるかどうかを調べるために一元配置分散分析を行った結果、3 グループ間で統計上有意な差はなかった(p=0.39)。したがって、スコアが上昇したかどうかは、学生の動機には有意な効果はないことがわかる。表 5 によると、すべてのグループにおいて TOEIC の受験が多少なり学習の動機となっていることを示しているが、このアンケートは 2 回目のスコアの返却をしたその直後に行っているので、少し精神的に興奮した状態にあることは否定できず、そのため少し英語学習へのやる気が過剰評価されている可能性があることを指摘しておかねばならない。

表 5: スコアの推移と動機づけの変化の影響の関係

	上昇グループ	下降グループ	無変化グループ	合計
平均	3.72	3.62	3.58	3.67

4. 結論

本稿では、TOEIC の正確性に対する学生の認識がスコアに対して過剰に楽観的な、あるいは逆に過剰に悲観的な見方へとつながっている可能性があることを指摘した。そのような見方は、TOEIC 側も意図したものではない。まず、学生には TOEIC のスコアやテスト間の差が意味するところの確率上の範囲に関する情報が必要だろう。また、調査結果から、TOEIC を 2 回受験した学生のなかで統計的に有意に英語力がついた、あるいは英語力が落ちたといえるのはたった 12%のみであるという事実からわかるように、残りの約 90%の学生は英語力が伸びたのか落ちたのかを判断することはできていない。したがって、少なくとも 1 年時の 5 月から 12 月までの英語力の伸びを測定する手段として TOEIC はふさわしくないと言わざるをえない。Childs によって指摘される懸念はこの場合、大いに当てはまるだろう。TOEIC を使用した場合、1 回目のテストと 2 回目のテストの結果に大きな差

異がなければ、英語力の変化を論じられないことを考慮に入れると、本学の場合実質的にそのような議論が可能な学生は 12%に過ぎず、学生にも教員にもあまり有益な情報は得られない。学生にとって唯一有益なことといえば、TOEIC を受験することによって多少学習への動機付けがなされることであろう。

TOEIC に明らかに無関心な学生がおり、TOEIC の結果によって英語を学習する動機を失っている学生もいる一方で、前述のように大部分の学生には英語学習への肯定的な動機づけとなっている。したがって、英語学習を促すという観点からすれば、TOEIC 受験のある意味興味深い意義が存在するといえるのだが、12%の学生しか統計的に有意な結果を得られないということや、2 回のテストの間の英語の授業時間が比較的少ないということを考慮に入れると、2 回のテストのスコアの差を解釈する際には、実際多大な注意が必要とされるということがわかる。

参照文献

Childs, M. (1995) *Good and bad uses of TOEIC by Japanese companies.* Japan Association of Language Teachers. Language Testing in Japan.

Educational Testing Service. (2007). *Examinee handbook.*
http://www.toeic.com.tw/file/TOEIC_LR_examinee_handbook.pdf

Educational Testing Service. (n.d.). *TOEIC Technical Manual.*
http://www.lc.fcu.edu.tw/Foreign_language_division/Linked%20documents/TOEIC_Tech_Man.pdf

Prolingua Executive Language Services. (n.d.). TOEIC Info.
http://www.prolingua.co.jp/toeic_j.html

Saegusa Y. (1985) *Prediction of English proficiency progress.* Musashino English and American Literature, Vol. 18 Tokyo: Musashino Women's University.

Wood, D. J. (2010). *TOEIC materials and preparation questions: Interview with an ETS representative.* The Language Teacher, 34 (6).

添付資料（アンケート用紙）：

TOEIC テストに関するアンケート

1. ２回目の試験（12 月）と１回目の試験（5 月）を比べて、スコアは上がりましたか、下がりましたか？あるいは同じでしたか？

   1. 上がった
   0. 同じだった
   -1. 下がった

2. 何点上がりましたか、あるいは下がりましたか？ _____ 点

3. TOEIC の試験はあなたの英語力をどの程度正確に測定できていると思いますか？

   5. とても正確に測定できていると思う
   4. ある程度正確に測定できていると思う
   3. まあまあ正確に測定できていると思う
   2. それほど正確に測定できていないと思う
   1. まったく正確に測定できていないと思う

4. ２回目の試験（12 月）の結果についてどのように感じますか？あてはまる項目すべてに○をしてください。

   1. うれしい
   2. 悲しい
   3. 落胆した
   4. 特に気にしない
   5. やる気がなくなった
   6. 満足だ
   7. 困惑している
   8. その他_____

5. 今回の TOEIC の結果が今後英語を学習していこうというあなたの動機にどのように影響しますか？

   5. かなりやる気になった
   4. 少しやる気になった
   3. 影響はない
   2. 少しやる気がなくなった
   1. かなりやる気がなくなった